



Inventing the ‘Chinese School’ of International Relations : the Construction of Knowledge of International Relations by Chinese Intellectuals

李, 玥

(Degree)

博士 (政治学)

(Date of Degree)

2025-03-06

(Date of Publication)

2027-03-06

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9108号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496389>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位請求論文審査報告要旨

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

り げつ

氏 名

李 珮

学位の種類

博士(政治学)

学位授与の要件

神戸大学学位規程第 5 条第 1 項該当

学位論文の題目

Inventing the 'Chinese School' of International Relations: the Construction of Knowledge of International Relations by Chinese Intellectuals

(国際関係論における「中国学派」の創出：中国知識人による国際関係論の構築)

審 査 委 員

主査 教 授 栗栖薫子

教 授 増島 建

教 授 松村尚子

論文内容の要旨

“Inventing the ‘Chinese School’ of International Relations: the Construction of Knowledge of International Relations by Chinese Intellectuals (国際関係論における「中国学派」の創出：中国知識人による国際関係論の構築)” と題する本博士論文は、国際関係論におけるいわゆる「グローバル国際関係論」を模索する潮流に位置付けられる。「グローバル国際関係論」によれば、20 世紀以来発展した国際関係論においては、欧米中心の世界観を反映し、欧米の歴史的・社会的状況に根ざした理論が主流となってきた。例えば、国際関係理論の主流となってきたリアリズム、リベラリズム、コンストラクティヴィズムの3つの理論体系は、欧米型の秩序観の下で構築されてきた。これに対し、国際関係理論の多様化を提唱する Amitav Acharya、Barry Buzan をはじめとする研究者たちは、欧米中心で生み出された知識のみでは、非欧米の地域的・歴史的文脈で発生する国際関係上の現象を説明し、解釈することができないと主張している。

本博士論文は、上記のような背景をふまえ、いわゆる「中国学派」の知的軌跡に焦点を当て、非欧米の研究者たちがなぜ、どのように、独特な文脈の中で国際関係理論を発展させたのかを解明するものである。そのために、より広範な国際関係論の学問領域に「中国学派」を位置づけ、「中国学派」の学問的背景として、1912 年以降、今日に至るまでの中国の国際関係論研究の発展を概観している。「中国学派」の構築に至る過程を解明するうえでは、長期的な歴史的、理論・思想的経緯を分析することが必要であるためである。そのうえで、著者は、「中国学派」に属する研究者たちの動機を解明し、その理論構築の特徴を説明し、中国の知識人たちが「中国学派」の理論のレンズを通してどのように世界秩序を構想したかを解明しようと試みている。したがって、現実の政策ニーズや理論的必要性だけでなく、中国の研究者たちの内的信念や知的コミットメントも分析の範疇に含めている。さらに、これらの学者たちが、儒教、法治主義などの中国の伝統的思想、さらには毛沢東主義のような現代的思想をどのように再解釈し、国際関係理論を構築するための知的資源として引き出したかを解明しようと試みている。

主要なリサーチ・クエスションは以下の通りである。第一に、国際関係論における「中国学派」とは何か、第二に、「中国学派」は誰のために、どのような目的で構築されたのか。これらの問いに包括的に取り組むために、本研究では主として定性的な研究手法を用いている。すなわち、「中国学派」とみなされる研究者による文献を渉猟し、その内容の特徴を分析している。また、これらの研究者への、詳細な聞き取り調査を実施し、「中国学派」形成の動機の解明を行っている。

本博士論文は5つの章で構成されている。第一章では、非欧米型な国際関係論とグローバル国際関係論という潮流の中に、いわゆる「中国学派」を位置づけて検討を行っている。第二章では、現代の「中国学派」につながるものとして、20 世紀初期からの中国の国

際関係理論の発展を概観している。次に、シンプルな定量テキスト分析を利用し、過去 30 年間に於いて中国学派をめぐる関心が、どのような側面において高まってきたのか等を説明している。また、主要な学術著作を年代順に整理し、中国の学者たちがなぜ「中国学派」の確立を目指したのか、彼らの著作における言説に基づいて追跡している。

第三章では、「中国学派」とは何か、そのメンバーとして見なされる研究者はだれなのか、また「中国学派」が中国内においてどのように認識されているのかを分析している。中国における国際関係論の学問的発展を高等教育機関の制度的発展との関連性のうえで論じ、マルクス主義・リアリズム・リベラリズム・コンストラクティビズムといった主流派の国際関係理論が中国においてどのように受け入れられ、内在化されたのかを概観し、加えて、英国学派への関心についても論じている。さらに中国国内の国際関係論研究者に対して、「中国学派」に関する聞き取り調査を行い、「中国学派」研究者の動機や自己認識、「中国学派」に対する評価についての分析を行っている。そこでは中国の伝統的世界観や思想に基づく規範的理論の構築が、その時代ごとの中国の政策概念（peaceful rise; harmonious world 等）の説明にも寄与することもあるが、他方で、必ずしも妥当しない場合もあることが示されている。第四章では、「中国学派」研究者の中で特に注目されている、3名の研究者をとりあげ、代表的な理論である、「天下」、「道義的現実主義」、「関係性理論」について詳細に分析している。

第五章は、「中国学派」の国際秩序観を描き出しており、なかでも、英国学派の国際社会論との対比において分析が展開されている。「天下」という概念が国内外の中国知識人の世界観に与えた影響について分析し、中国学派の研究者たちが「天下」という世界観をおおむね受容していることが提示されている。「天下」という世界観に基づき、中国の研究者は無意識にも意識的にも中国の道徳的大国としての地位を認める傾向がある。また、世界における中国のアイデンティティを、「責任ある仲介者」としての中国の役割と、朝貢秩序時代に由来する「不干涉原則」に合致する形で理解しているという。また、中国の学者が英国学派に着目するのは、両者が歴史性をその理論的道筋において高く評価し、世界秩序を論じているからであるという。

「中国学派」の理論は、中国を中心とする世界秩序を探求する理論の集合体であるとも言える。このように、「中国学派」の構築には、中国の知識人の世界秩序観が根本的な要因となったことが分かると述べている。最後に本論文の限界として、「中国性」の特殊性を強調するあまり、その一般性を理解するための分析が不十分であること、本論文で引用した中国語の原文献の多くは著者の認識を経て翻訳されたためバイアスを回避することはできなかったことを指摘している。

論文審査の結果の要旨

「中国学派」に関する先行研究は、(1)「中国学派」の出現に至る過程を国際社会における中国の台頭と関連づけて論じるもの、(2)「中国学派」を中国政府のスポークスパーソンの存在として位置づけるもの、(3)「中国学派」による現実の国際関係上の現象の説明力を問うもの、(4)「中国学派」とグローバル国際関係論との関係についての分析するものに大別することができる。これに対して、本博士論文は、中国の国際関係論研究者の認識や動機に焦点をあて、「中国学派」とは何かを解明しようとした点に新規性がある。「中国学派」の起源、進化、内的な発展のメカニズムを解明した本研究は、中国の知識社会における非欧米型国際関係理論—「中国学派」—の特徴を明らかにするものである。

なかでも、次の点において本研究の新規性を認めることができる。第一に、本研究は、「中国学派」がグローバルな国際関係論とどのように国際的なコミュニケーションを行ったかを文献調査ならびに聞き取り調査を通じて記述しつつ、その内在的かつ個別的な発展の文脈と研究者の動機を解明しようとした。第二に、「中国学派」の出現が、中国の台頭によってもたらされた中国の知識人の「自信」に基づくものであったことは、先行研究で指摘されるところであるが、本研究では、それだけではなく、「中国学派」の主な原動力として、中国人研究者の学問的覚醒（主流の国際関係論への抵抗）と中国文化についての内生的な信念による中国型国際関係論の進化を強調している。著者は、中国の知識人が、「中国らしさ」を探究し構築しようとする中で、伝統な世界観に依拠しつつ、現代の国際社会に適合する形で世界観を一部進化させていったと論じる。また、「中国学派」の構築を通じた自己表象をめぐる継続的な取り組みとして、これらの動きを理解することができるとも述べている。第三に、中国国内においては、国際関係論分野における社会主義理論の位置づけとは異なり、「中国学派」は非主流的なものにとどまっている。本論文は、「中国学派」の研究者たちが、いかにして公的な政策態度と研究者としての自己の創造性とのバランスを保ってきたのかにも注目している。第四に、現代中国における様々な制約にもかかわらず、「中国学派」を中心とする国際関係論研究者への聞き取り調査を行ったことには、資料的な価値を見出すことができる。聞き取り調査には、「中国学派」のメンバーだけでなく非メンバーを含めており、「中国学派」のより包括的な理解を可能にしているといえよう。

以上のような本研究の価値を認めつつも、今後追究すべき複数の課題が残されていることを指摘したい。第一に、著者は、「中国学派」の取組をグローバル国際関係論の潮流に位置付けつつも、中国型の国際関係理論構築の試みはそれ以前から歴史的に存在し継続してきたと述べる。他方、「中国学派」は、欧米型の主流派の国際関係理論にかわる覇権を目指すものではなく、主流的国際関係理論への一つの「抵抗」でもあるとも位置付けている。こ

の一見異なる分析結果をどのように整理し、結論づけるべきかについて、さらなる考察を要すると思われる。第二に、本論文は、単に、グローバル国際関係論の中に「中国学派」を位置づけてその特徴を解明するという研究ではなく、中国の国際関係論研究者の自己認識や学問的動機を分析視角とする試みである。しかし、このような国内社会や政治の中におかれた知識人の動向を質的に分析するうえでの分析手法としては、聞き取り調査のみでは十分とはいえず、よりしっかりとした方法論と理論が必要となろう。

また、審査委員会による口述試験においては次のような指摘があった。第一に、現実の国際関係と理論的發展との相互の関係性について、より踏み込んだ分析が必要である。文化的・伝統的背景の影響については論文において論じているが、中国の経済・軍事的国力の台頭に代表される国際社会における中国の立ち位置の変化が、同学派に対してどのような影響を及ぼしたのかについて、さらに考察が必要である。第二に、聞き取り調査の記述は興味深いものがあるが、そこから明確な論理を導き出すことにおいて十分ではない。第三に、定量テキスト分析の部分については、データの前処理を含めた分析手順を論文中に明示する必要がある。

以上のような課題は残されているものの、本研究は、古典思想と現代国際関係論の丹念な文献の読み込み、詳細な聞き取り調査に基づき、「中国学派」の社会的構築に着目し「中国らしさ」の探求と構築における中国の国際関係知識人の世界観、自己表象を分析することにより、「中国学派」とは何かについての学術的な理解を深めることに貢献したといえよう。

以上の理由により、審査委員は、本論文の著者である李玥氏が博士(政治学)の学位を授与されるのに十分な資格を有するものと判定する。

令和 7年 2月20日

審査委員 主査 教授 栗栖薫子
教授 増島 建
教授 松村尚子